



A TREASURY OF WORLD LITERATURE

# 世界の文学

53

イギリス名作集

アメリカ名作集

中央公論社

イギリス名作集  
アメリカ名作集

訳者 朱牟田夏雄他

ANIMAL FARM by George Orwell  
Originally Copyrighted by the author.  
Illustrations: Copyrighted by John Halas  
and Joy Batchelor.  
The Dead illustrated by Robin Jacques  
Copyrighted by Jonathan Cape Ltd.,  
London.

These Japanese rights arranged through  
Charles E. Tuttle Co., Inc., Tokyo.

昭和41年12月1日初版印刷  
昭和41年12月10日初版発行

価 390 円

発行者 宮本信太郎

本文整版印刷 三晃印刷株式会社  
扉・函貼印刷 求竜堂印刷株式会社  
口絵印刷 東京プロセス株式会社  
本文用紙 三菱製紙株式会社  
クロス 日本クロス工業株式会社  
製函 加藤製函印刷株式会社  
函ボール 佐賀板紙株式会社  
製本 小泉製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地  
電話(561)5921(代) 振替東京34

監修

伊藤 整

伊吹武彦

手塚富雄

西川正身

渡辺一夫

目次

イギリス名作集

ステイーヴンソン

ジキル博士とハイド氏

ハーデイ

アリシアの日記

コンラッド

秘密をともしする者

ジョイス

死せる人々

マンスフィールド

風が吹く

7

74

110

151

196

園遊会

は え

ハックスリー

神 童

オーウェル

動物農園

アメリカ名作集

ポ ー

盗まれた手紙

メルヴィル

書記バートルビー

マーク・トウェイン

ノータリン・ウィルソンの悲劇

388

347

329

262

225

218 200

アンダーソン

森の中の死

スタインベック

ジョン熊

解説

169

548

536





イギリス名作集



## ジキル博士とハイド氏

——奇怪なる事件——

ステイヴンソン

太田三郎訳

ドアをめぐる話

弁護士のアタソンさんはきつい顔つきの人で、明るい笑いが顔にうかぶことは全然ありません。話しぶりは冷静、口数は少なく、口べたでした。感情はあらわさない。やせて背は高く、愛想がわるく、陰気、でもどこことなく人好きがしました。親しい人たちの集まりで、しかも気に入った葡萄酒がでているときには、何かほんとうに人間味がその目から輝いていました。その人間味というのは、アタソンさんの談話のなかには全然でてこないものですが、夕食後のあの穏やかな目にうかんでくるだけで

はなく、あの人の毎日の行動にはもつとしよつちゆう、もつとはつきり現われてくるものでした。ふだんは厳しい生活態度をとっていました、客人がいないときにはジンを飲んで、上等な葡萄酒を飲みたい心を抑えていたのです。芝居が好きでしたが、もう二十年も劇場に入ったことはありません。でも他人にたいして寛大な気持をもっていることはだれでも認めていました。ときにはうらやましいぐらいの気持で、他人が不行跡ふぎよせきにそそぐ情熱に感心していました。そして相手がどんな窮境きうけいに陥っているときでも非難するよりは助けてやる気持をもっていました。「僕はカイン式の逆説ぎさくをとりたくなるなあ」といつも古めかしい言いかたをしていました。「僕なら兄貴には自分勝手に悪魔のところへ行ってもらうね」こういう性格でしたから人生の下り坂にある連中の中で、いちばん評判の良い友人、またいちばん良い感化をあたえる友人となる、これがアタソンさんの運命でありました。こんな人たちにたいしては、自分の法律事務所ほつしむじよに連中がやつてくるかぎり、その態度に少しの変化もみせなかつたのです。

疑いもなく、アタソンさんにはこの態度が楽なのでし

\* 旧約聖書によると、弟アベルを殺したカインは、神にアベルの所を問われると「私は弟の番をしているものでしょうか」と答えたという。

た。いくら努力しても内気な態度しかとれなかったのですし、そのうえ、彼の友情は内気な、度量のひろい優しい心の上に築かれているようでしたから。偶然の機会でも知りあった友人たちと親しくするのが内気な人間の特徴なのです。そして、これこそ弁護士アタソンさんの生きかたでした。彼の友人といえは自分の親戚の者か、さもなければ長い間知りあった人たちでした。彼のいづく親愛感あいきんは、鶯のように、年月とともに育ったもので、相手が親愛感に値いするからというためではありません。アタソンさんをリチャード・エンフィールドさんに結びつけたきずなも、もちろん、こういうものでありました。

リチャードは遠い親戚にあたり、ロンドンの有名な高等遊民ユウミンでした。この二人がお互いをどんな人間だと考えていたのか、どんな話題を共通にみつけたせるのか、これこそたたくさんの人たちには解きがたい問題でありました。二人が日曜日に連れだつて散歩しているところに出会った人たちは、二人は口もきかず、ひどくつまらなそうであつて、知人の姿がみえるとはほんとはほつとした様子で挨拶をする、と噂をしていました。それにもかかわらず、二人の友人は日曜日の散歩をこのうえもなく大切に、毎週の第一の楽しみとしていて、遊樂の機会を他にもとめないばかりか、何にも邪魔されずに散歩を楽しむためには、用事もことわつていたのです。

たまたまこの日曜日の散歩をしていたときのこと、二人はロンドンの繁華街の裏通りへとさしかかりました。この通りは狭く、いわゆる落ちついたところでしたが、ふだんの日には商売の盛んなところでした。住んでいる人たちは皆景気よくやつているようでした。もつと景気よくやりたいと皆が望んでいて、余分の収入は客の目をひくような飾りにと使つていました。というわけで、まるで微笑をうかべた女店員が並んでいるように、客を惹きつける装いの店先がこの街につづいていました。日曜日には、ふだんなら派手に人目をひいているものもかくされていて、比較的人通りも少ないのですが、その日曜日でさえこの街は、ちょうど森のなかの焚火たき火のように、陰気な周囲とは対照的に、光り輝いていました。ペンキを塗りたてたシャッター、磨きあげた真鍮しんちゆうの金具、すべて清潔で美しい雰囲気などが通る人の目をすぐとらえ、楽しませてくれました。

ある街角から二軒目のところ、左手は東へと通じていますが、通りが切れてコート(表通りの家の裏側に方形の広場がところをいう。表通りか)の入口になっていました。そしてちよら入口が通じている)の入口になっていました。そしてちよらうどそこの所に、何とかいう名の、感じの悪い大きな建物が破風を通りに突きだしていました。それは二階建、窓はなく、一階のドアと二階の色のあせた、窓のない外壁だけしかみえなかつたのです。どこからみても長い年

月の間むさくるしい姿で打ちすてられていたことがわかりました。ドアには、呼鈴もノックカーもついていないし、ペンキははげ、汚れていました。浮浪者が隅に入りこんでごろごろし、破目板でマツチをすっている、子供が石段で店屋遊びをする、学校の生徒は壁の蛇腹で小刀の切れ味をためしてみる。もう二、三十年の間こういひどい連中を追い払ったり、あるいは痛められた箇所を修繕したりした者は一人もいなかったのです。

エンフィールドさんと弁護士はこの裏通りの反対側に来かかりました。でもコートの入口の真向かいにさしかかったとき、エンフィールドさんがステッキをあげて指し示しました。

「あのドアに注意したことがあるかね」とたずねました。相手が、ある、と答えると、「あのドアは、ぼくの記憶のなかでは、とても奇怪な話と結びついているんだ」と言いだしました。

「ほんとうかね？」とアタソンさんは、ちよつと声の調子をかえて、「それは何ごとだね？」

「うん、こんなことなんだ」とエンフィールドさんが答えました——「僕がね、どこだったかとても遠いところから帰ってくる途中、真つ暗な冬の朝、三時ごろでしたよ、全く街燈のほかには何ひとつ見えない一郭を僕は歩いてたんだ。いくら歩いても通りがつつぎ、人間は皆

眠っている、——どの通りもどの通りも行列が通るみたいに街燈がついていてしかも人っ子一人通っていない、——しまいに僕も、聴き耳をじつとたてる、そして巡査の姿が見たくなりはじめ、ああいう気持になったのだよ。突然、そのとき二人の人影を僕はみつけたのだ。一人は小柄な男で東のほうへととつと足音も荒く立ち去ろうとしていた、もう一人は八つか十ぐらいの女の子で、十字路を一生懸命に走ってわたろうとしていた。ところがだ、君、この二人は当然のことだが角でぶつかったんだ。そして大変、怖ろしいことが起こったんだよ。この男は女の子の体を平然と踏みつけた、そして女の子が地面に倒れ、きいきい泣いているのを打ちすてて行くうとしたのだ。話にきいたのでは何でもないが、見るに堪えられないものだった。人間とはみえなかつたなあ、何か、呪われたジャガノートのジャガノートのような奴さ。僕はこれを見て驚いて大声をたてて駆けだして、相手の男のえり首をつかまえて連れもどしたが、そのときすでに泣き叫ぶ女の子のまわりにはたくさんの人が集まっていた。男は落ちつきはらつていて、抵抗もせず僕をじろつと見たが、ひどく恐ろしい顔つきをしていたから、僕は走った

\* インドのクリシナ神のこと。その偶像を乗せた車にひかれて死ぬと極楽往生できると信じられ、そのため自ら求めてひかれる者さえあるという。

後のように、全身に冷汗をかいたほどだよ。飛びだしてきた人は子供の家の人たちさ。すぐ医者がやってきた、女の子はこの医者呼びにいったのだった。ところだ、この女の子は、たいして怪我しているのではなく、脅えのほうかひどいのだ、外科医の話ではね。まあ、この話もこれで終わりだと、君は考えるにちがいないが。だが奇妙なことが一つあるのさ。この男を一目見たとき僕は胸が悪くなったのだ。女の子の家族もそうだった、そりゃ当然のことだがね。しかし医者の態度こそ僕の忘れられないところだ。ごく平凡な医者で、年齢、様子にこれという特徴はない、エディンバラ訛りがひどいし、全く感情なんかないみたいなんだ。ところがだ、君、この医者は僕たちと同じなのだ、男を見るたびに、医者は相手を殺したいといわんばかりに真つ蒼な顔になるのが僕にはわかった。医者の考えていることが僕にはわかった。医者も僕の心がわかっていたように、ね。だが殺すというわけにはゆかないから、次善の策を僕たちはとったのさ。こんなひどい所業を世間に知らせてやれば、ロンドンの隅から隅まで、この男は悪人だと評判をたてることもできるぞ、そうしてやりたいのだ、と男に言つてやつたんだ。友人があるなら、信用があるのなら、皆失つてしまふようにしてやれるのだ、とね。真つ赤になつて奴をやつつけていた間ずっと、女たちをできるだけ男から

遠ざけておいた、だって女たちはハーピー(ギリシア神話の翼をもつ)の翼をもつ)のようにならね。こんなに憎悪にもえた人々の顔をみたことはないなあ。この男は人々にとりまかれ真中に立っている、むっとして冷笑するような平然たる態度だ——やはり震えていたさ、僕にはそれがわかった——だが、平気な様子をよそおっていたよ、君、ほんとうにサタンのように、だ。『皆さんがこの騒ぎを金にしようとするのなら』と男は言つたよ。『もちろん、仕方がない。紳士ならこの場を逃げだそうなどとはしないさ』と男は言う。『金額を言つてくれ』そこで、僕は女の子の家族に百ポンド払えと奴にふっかけてやった。奴はあきらかに拒絶したかつたらしい。僕たちには皆何となく、やつつけてやれという感じがあつたのさ、で、結局奴は承知したのさ。今度は百ポンドの金を受けとるのが問題になった。ところが、君、どこに奴が僕らを連れていったと思う？ あのドアのある家だよ。——鍵をひよいととりだして、中へ入り、すぐ、まさに、金貨で十ポンド、残りはタウツ銀行の小切手、持参人払いで、署名がしてある、その署名人の名は僕の口からは言えないよ、ここが僕の話の大切な点なんだがね、だがその名前はとも有名で、しょっちゅう活字になっている人だ、ともかく。金額は大きい、だが署名はその金額以上の金額さえ立派に保証するものさ、もし署名がほんものなら

ば、だがね。僕は思いきってこの男に言つてやつたさ、この話は信用できない、朝の四時に物置のドアから家中へ入り、百ポンド近い金額の他人名義の小切手を持つて出てくる人物は、この世の中には、ありえない、とね。ところが奴は全然平気であざ笑っている。『安心なさいよ』と言う、『銀行が開くまで君といっしょにいて、小切手は自分で現金にしてあげよう』というわけで僕たちは皆出かけたのさ、医者、子供の父親、例の男、それから僕、さ。そして夜があげるまで僕の家で待つていた。そして翌朝、朝食をしてから、揃つて銀行へ行つたのだ。僕が自分で小切手を差し出して言つたのさ、これは偽造だと思ふ十分な理由がある、とね。全然。小切手はほんものだった」

「ちえ、ちえ」とアタソンさんは言いました。

「わかりますよ、君も僕と同じ気持ちになつてゐるのを」とエンフィールドさんは言いました。「まさに、ひどい話だ。だつて僕の会つた男というのは、だれだつて我慢できないような男、ほんとうにぞつとする奴、なんだ。

ところが小切手を振り出した人物はたしなみの点では模範的だし、かつ有名な人だ、それに——こいつがいよいよ困りものなんだが——いわゆる善行をする人たちの一人なのだ。脅迫したんだ、と僕は思うよ。何か若いときの戯れのために莫大な金を払わされている正直者だな。と

いうわけで、恐喝の家、とあのドアのある家を僕は呼んでいるのだ。これだけでは、いいですか、すっかり話しておえたことには到底ならぬんだなあ」と彼は言ひました、そう言いながらだんだんと考えこんでいきました。

考えこんでいるところを、アタソンさんが唐突とおもえる様子で訊ねてきたので、彼は我にもどりました。

——「で、君は知らないのかね、小切手の振出人がその家に住んでいるかどうか？」

「住んでいそうな家だ、ねえ？」とエンフィールドさんは答えました。「偶然だが、その人のアドレスを注意して見ておいたのさ、どこかスクエア(方形になった住宅街の一郭)かなにかに住んでいる」

「じゃ、きかなかつたんだね、君は——そのドアのある家のことを？」とアタソンさんが言いました。

「きかないんだ、よ、慎重だからね」という答え。「せんさくするのがとても気になるんだ、僕は。質問には審判の目みたいところが大きいにあるからなあ。質問をはじめる、というのは石をころがしはじめるようなものなのだ。君は山の頂上にじつと坐つてゐる、そして石はころがってゆく、他の石もころがるところがしながらさ。そのうちだれか罪もない老人が——君が到底思いつけないほど善良な老人さ——、自分の家の裏庭にいて頭をこの石で打たれて死んでしまふ。残された家族はそんな死に

かたを恥じて名前をかえなけりや、ということになる。

だめだよ、君、これが僕の処生訓さ、——疑問とみえればいいよ、僕はきかないでおくのだよ」

「いい処世法だよ、やはり」と弁護士が言いました。

「いや、僕はその家を自分で調べてみたんだ」とエンフィールドさんが話をつづけました。「そこは人間の住む家とは、まず、見えない。他にドアはない、それに、このたった一つのドアを入りする者はだれもないのだ、ごくたまに、あの男、即ち僕が偶然ぶつかった例の紳士をのぞけばだ。二階にはコートに面して窓が三つある。

一階には一つもない。それからチムニー(煙突)がある、こいつはだいたいいつでも煙を吐いているんだ。だから、だれかが住んでいるにちがいない。といて、あまりはつきりしない。このコートのまわりには建物がぎっしり並んでいるから、建物と建物との境がはつきりしないのさ」

二人はまた黙ってしばらく歩きました。そのとき、「エンフィールド君」とアタソンさんが申しました。「何もききたささない、これは君には賢いやりかただよ」

「そうさ、僕もそうだと思ふんだ」とエンフィールドが答えました。「でも、それにしても」弁護士は言いつづけました。「僕のききたいことが一つある、僕は名前を知りたいのだよ、子供を踏みつけた男の、ね」

「うん」とエンフィールドさんが言いました。「名前ぐらいなら、喋っても何ということもないだろう。それはハイドという名前の男だった」

「うーん」とアタソンさんはうなりました。「どんなふうな人間かね、見たところは？」

「あの男は簡単には言えないね。人相が何か変なんだ。何か不快な、何か全くむかむかするんだ。あんなに嫌な奴見たことがない。といてなぜだかわかりかねる。どこか体が片輪なんだなあ。片輪という感じを強くあたえるんだ、どこが、とはつきりは言えないんだが。異様な人相の男だ、しかもどこが異常だとは指摘できない。できなないんだ、君、僕は説明できない、口では言えない。はつきり覚えていないからじゃない。だって断言できるんだ、今、このときでも目の前に見えるんだから」

アタソンさんはまたしばらく黙りこくって歩いていました、考えこんでいたことはあきらかにわかりました。

「間違いないのかな、その男が鍵を使って開けたのは？」とアタソンさんはやがてききました。

「君は、君……」とエンフィールドさんは、いらいらしながら言いました。

「うん、わかっているよ」とアタソンが言いました。「よくわかるよ、奇妙に思われるのは。こうなんだ、君に相手の男の名前をきかなくても、それは、僕が名前を



とつくに知っているからきかないんだよ。いいか、リチャード、君の話はざぼりだったよ。どこかその話に不正確なところがあるなら、訂正してくれたらほうがいいぜ」「君、僕に注意してくれたらよかったのに」と相手は少少むっとした様子で答えました。「でも僕はいわゆる学者先生そっくりに、正確な話をしたんだぜ。この男は鍵を持っていて、そのうえ、奴は今でも持っているんだ。奴が鍵を使ってるのを見た、まだ一週間もたたないことだが」

アタソンさんはふっと溜息をつきましたが、何も言いませんでした。この青年紳士はやがて言葉をつぎました。「また、言わざる、という教訓だね」と言いました。「長長とお喋りして恥ずかしいよ。お互いに二度とこの話をしないと約束しよう」

「承知したよ」と弁護士は申しました。「約束のしるしに握手しよう、リチャード」

### ハイド氏を求めて

その晩、アタソンさんは憂鬱になって独り住いの家へもどってきたが、夕食をたべても食欲はありませんでした。日曜日の夜といえ、夕食後は、煖炉のそばに椅子をひきよせ、読書机の上に無味乾燥な神学書を一冊ひろ

げる、これがアタソンさんの習慣でした。そしてやがて近所の教会の時計が十二時をひびかせる、するとゆつくりと、感謝の心をいだいてベッドへ行くのでした。その日の晩は、ところが、アタソンさんは食卓が片づけられるとすぐ、灯りを手にして事務室へ行きました。そこで金庫をあけ、いちばん奥まったところから書類をとりだしましたが、その封筒には、『ジキル博士遺言状』と記されていました、そして椅子に腰かけ、額をくもらせながらその内容を調べました。この遺言は全文ジキル博士の自筆のものでした。アタソンさんは、これが作成されてからずっと保管していますが、作成されるとき手を貸すことを全然断わっていたためジキル博士の自筆でかかれたのでした。医学博士、法学博士、文学博士、学士院会員、その他の肩書をもつヘンリー・ジキルの死去した際には、その全財産はその『友人であり恩人であるエドワード・ハイド』の手に渡されるべきこと、それだけではなく、さらにジキル博士の『三ヵ月以上に及ぶ期間、失踪または理由なき所在不明』の場合にも前記のエドワード・ハイドが前記のヘンリー・ジキルの財産を、即刻かつなんらの負担あるいは義務を伴うことなく博士の家庭の者たちに支払われるべき若干の小額のものを除き、相続すべきこと、が定められていたのです。この文書は長い間この弁護士の気がかりの種になっていました。こ